

# 障害者虐待防止法の概要

弁護士 関哉直人

# 講義のねらい

この時間は、障害者虐待防止法の全体像を知っていただくとともに、支援現場での事例を踏まえ、法の求める「虐待」の意味を理解し、日々の支援につなげていただくことを目標としています。  
この講義を通じて知ってもらいたいことは、以下の3点です。

## 【ポイント】

- ① 虐待と「尊厳」「自立」「社会参加」
- ② 尊厳とは何か
- ③ 意識を現場で共有する取組み

# 目的(趣旨)

障害者に対する虐待が障害者の尊厳を害するものであり、障害者の自立及び社会参加にとって障害者に対する虐待を防止することが極めて重大であること等に鑑み、障害者に対する虐待の禁止、国等の責務、障害者虐待を受けた障害者に対する保護及び自立の支援のための措置、養護者に対する支援のための措置等を定めることにより、障害者虐待の防止、養護者に対する支援等に対する施策を促進し、もって障害者の権利利益の擁護に資することを目的とする。

# 通報義務と養護者支援

## 「養護者支援」

- 罰するのではなく、防止
- 従事者支援の考え方
- 虐待かどうかは状態で判断する  
＝問われるべきは状態を作り出してきたもの

# 障害者虐待の内容

- ① 身体的虐待
- ② 性的虐待
- ③ 心理的虐待
- ④ ネグレクト
- ⑤ 経済的虐待

# 施設従事者等による虐待

- 一 障害者の身体に外傷が生じ、若しくは生じるおそれのある暴行を加え、又は正当な理由なく障害者の身体を拘束すること
- 二 障害者にわいせつな行為をすること又は障害者をしてわいせつな行為をさせること
- 三 障害者に対する著しい暴言、著しく拒絶的な対応又は不当な差別的言動その他の障害者に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと
- 四 障害者を衰弱させるような著しい減食又は長時間の放置、当該障害者福祉施設に入所し、その他当該障害者福祉施設を利用する他の障害者又は当該障害福祉サービス事業等に係るサービスの提供を受ける他の障害者による前三号に掲げる行為と同様の行為の放置その他の障害者を養護すべき職務上の義務を怠ること
- 五 障害者の財産を不当に処分することその他障害者から不当に財産上の利益を得ること

# 心理的虐待の例

脅しや侮辱などの言語や威圧的な態度、無視、嫌がらせ等によって、精神的苦痛を与えること。

- ・ 障害に伴う言動などを嘲笑したり、それを人前で話すなどにより、障害者に恥をかかせる(排泄の失敗、食べこぼしなど)。
- ・ 侮蔑を込めて、子どものように扱う。
- ・ 話しかけているのに意図的に無視する
- ・ 排泄交換や片づけをしやすいという目的で、本人の尊厳を無視して、トイレに行けるのにおむつをあてたり、食事の全介助をする。
- ・ 家族や親族、友人等との団らんから排除する。

威嚇的な発言、態度

- ・ 「ここ(施設等)にいられなくなるよ」「追い出す」などと言い脅す。

侮辱的な発言、態度

- ・ 排泄の失敗や食べこぼしなどを嘲笑する。
- ・ 排泄介助の際、「臭い」「汚い」などと言う。
- ・ 子ども扱いするような呼称で呼ぶ。
- ・ 本人の意思に反して呼び捨て、あだ名などで呼ぶ。

# 心理的虐待の例

障害者や家族の存在や行為、**尊厳を否定、無視するような発言、態度**

- ・ 無視する。
- ・ 「意味もなく呼ばないで」「どうしてこんなことができないの」などと言う。
- ・ 話しかけ等を無視する。
- ・ 障害者の大切にしているものを乱暴に扱う、壊す、捨てる。
- ・ したくてもできないことを当てつけにやってみせる(他の利用者にやらせる)。

障害者の**意欲や自立心を低下させる**行為

- ・ 自分で食事ができるのに、職員の都合を優先し、本人の意思や状態を無視して食事の全介助をする、職員が提供しやすいように食事を混ぜる。
- ・ 自分で服薬ができるのに、食事に薬を混ぜて提供する。

交換条件の提示

- ・ 「これができたら外出させてあげる」「買いたいならこれをしてからにしてください」などの交換条件を提示する。

心理的に障害者を不当に孤立させる行為

- ・ 面会者が訪れても、本人の意思や状態を無視して面会させない。

その他著しい心理的外傷を与える言動

- ・ 本人の意思に反した異性介助を繰り返す。
- ・ 浴室脱衣所で、異性の利用者を一緒に着替えさせたりする。



# ネグレクトの例

意図的であるか、結果的であるかを問わず、介助や生活の世話を行っている者が、その提供を放棄又は放任し、障害者の生活環境や、障害者自身の身体・精神的状態を悪化させていること。

- ・ 室内にごみを放置する、掃除をしない、冷暖房を使わせないなど、劣悪な住環境の中で生活させる。

障害者の**権利や尊厳を無視した**行為又はその行為の放置

- ・ 他の利用者に暴力を振るう障害者に対して、何ら予防的手立てをしていない。
- ・ 話しかけ等に対し「ちょっと待って」と言ったまま対応しない。

# 経済的虐待の例

本人の同意(表面上は同意しているように見えても、本心からの同意かどうかを見極める必要がある。)なしに財産や金銭を使用し、本人の希望する金銭の使用を理由なく制限すること。

- ・ 日常生活に必要な金銭を渡さない、使わせない。不当に制限する。
- ・ 年金や賃金を管理して渡さない。
- ・ 年金や預貯金を無断で使用する。
- ・ 事業所、法人に金銭を寄付・贈与するよう強要する。
- ・ 本人の財産を、本人が知らない又は支払うべきではない支払に充てる。
- ・ 立場を利用して、「お金を貸してほしい」と頼み、借りる。
- ・ 本人に無断で親族にお金を渡す、貸す。

# 早期発見義務

障害者福祉施設、学校、医療機関、保健所その他障害者の福祉に業務上関係のある団体並びに障害者福祉施設従事者等、学校の教職員、医師、歯科医師、保健師、弁護士その他障害者の福祉に職務上関係のある者及び使用者は、障害者虐待を発見しやすい立場にあることを自覚し、障害者虐待の早期発見に努めなければならない。

# 通報義務

障害者福祉施設従事者等による障害者虐待を受けたと思われる障害者を発見した者は、速やかに、これを市町村に通報しなければならない。

※ 障害者福祉施設従事者等は、通報をしたことを理由として、解雇その他不利益な取扱いを受けない。

# 虐待研修・委員会等の義務化

- ① 従業者への**研修**実施
- ② 虐待防止のための対策を検討する**委員会**として虐待防止委員会(注)を設置するとともに、委員会での検討結果を従業者に周知徹底する
- ③ 虐待の防止等のための**責任者**の設置

(注)虐待防止委員会に求められる役割は、虐待の未然防止や虐待事案発生時の検証や再発防止策の検討等

# 身体拘束廃止に関する義務化

- ① 身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録すること。
- ② 身体拘束等の適正化のための対策を検討する委員会を定期的を開催するとともに、その結果について、従業者に周知徹底を図ること。
- ③ 身体拘束等の適正化のための指針を整備すること。
- ④ 従業者に対し、身体拘束等の適正化のための研修を定期的を実施すること。

※虐待防止の取組で身体拘束等の適正化について取り扱う場合には、身体拘束等の適正化に取り組んでいるものとみなす。

※運営基準の①から④を満たしていない場合に、基本報酬を減算（身体拘束廃止未実施減算5単位／日）

ただし②から④については令和5年4月から適用。訪問系サービスについては、①から④の全てを令和5年4月から適用。

# 施設・事業所従事者向け手引き

障害者福祉施設等における  
障害者虐待の防止と対応の手引き

令和4年4月

厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部  
障害福祉課 地域生活支援推進室

# 手引き16頁

## (2) 運営基準の遵守

障害者福祉施設等は、「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準」や「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害福祉サービスの事業所等の人員、設備及び運営に関する基準について」（以下「運営基準」という。）に従うことが義務付けられています。

令和4年4月から障害福祉施設等の運営基準に基づき、虐待の発生又はその再発を防止するため、新たに以下の措置を講じることが義務化されました。

- ア 虐待の防止のための対策を検討する委員会を定期的を開催すると共に、その結果について、従業者に周知徹底を図ること
- イ 従業者に対し、虐待の防止のための研修を定期的を実施すること
- ウ アとイに掲げる措置を適切に実施するための担当者を置くこと

また、障害者福祉施設等の運営についての重要事項に関する運営規程に、虐待の防止のための措置に関する事項を定めなくてはならないこととされています。具体的には、

- ア 虐待の防止に関する責任者の選定
  - イ 成年後見制度の利用支援
  - ウ 苦情解決体制の整備
  - エ 従業者に対する虐待の防止を啓発・普及するための研修の実施（研修方法や研修計画等）
  - オ 虐待防止委員会の設置等に関すること
- 等を指します。



# 手引き38頁

○障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準

(身体拘束等の禁止)

第48条 指定障害者支援施設等は、施設障害福祉サービスの提供に当たっては、利用者又は他の利用者の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体的拘束その他利用者の行動を制限する行為（以下「身体拘束等」という。）を行ってはならない。

2 指定障害者支援施設等は、やむを得ず身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録しなければならない。

3 指定障害者支援施設等は、身体拘束等の適正化を図るため、次に掲げる措置を講じなければならない。

一 身体拘束等の適正化のための対策を検討する委員会（テレビ電話装置等を活用して行うことができるものとする。）を定期的で開催するとともに、その結果について、従業者に周知徹底を図ること。

二 身体拘束等の適正化のための指針を整備すること。

三 従業者に対し、身体拘束等の適正化のための研修を定期的を実施すること。

※「指定障害福祉サービスの人員、設備、運営基準」にも同様の規定あり。

# 手引き18頁、39頁

<参考：小規模事業所の体制整備等における効果的な取組ポイント>

※令和3年度障害者総合福祉推進事業「障害者虐待防止の効果的な体制整備に関する研究事例集」（PwC コンサルティング合同会社）より一部抜粋

## ○ 虐待防止

カテゴリ	効果的と考えられる取組ポイント
研修の実施	<p>① 虐待防止等に関する研修情報を行政機関や基幹相談支援センター等から収集し、それらの機関が実施する研修機会を積極的に活用する。 ※解釈通知では、「研修の実施は、施設内で行う職員研修及び協議会又は基幹相談支援センター等が実施する研修に事業所が参加した場合でも差し支えない。」とされています。</p> <p>② 域内で積極的に虐待防止等に関する研修を行っている大規模な事業所や法人等があれば、当該事業所が開催する合同研修に参加する。</p> <p>③ 研修に参加できなかった職員に対しては、研修を録画し、その視聴を促したり、研修の参加者が所内で研修に参加できなかった職員への伝達研修を実施したりする。あるいは外部研修をもとに事業所所内で研修を実施する。</p>
虐待防止委員会の開催	<p>④ 虐待防止委員会は、法人単位で委員会を設置し、法人（理事長等）が運営や取りまとめをサポートする。 ※解釈通知の中では、「虐待防止委員会の開催に必要となる人数は、事業所の管理者や虐待防止担当者（必置）が参画していれば、最低人数は問わない。事業所単位でなく、法人単位での委員会設置も可であるため、事業所の規模に応じた対応を検討すること。」とされています。</p> <p>⑤ 虐待防止委員会は実地での開催に限定せず、オンライン会議等を使用し、第三者が参加しやすいように工夫する。 ※第三者は、弁護士等の専門家のみならず、自立支援協議会を構成する他事業所等も当たると考えられる。</p> <p>⑥ 既存の会議体や委員会（定期的な事業所での会議やケースカンファレンス等）の開催に併せて虐待防止委員会を実施する。</p>
指針の整備	<p>⑦ 虐待防止等のために必要な指針等は、ゼロベースで作成することのみならず、本事例集に紹介されている様式や公表資料等から雛形を入手し、それをたたき台にして検討を進める。</p>

# 身体拘束の法令上の位置づけ

「障害者の身体に外傷が生じ、若しくは生じるおそれのある暴行を加え、又は正当な理由なく障害者の身体を拘束すること」は身体的虐待

※ 「正当な理由」: 3要件

# 身体拘束の要件・手続

## ➤ 要件

①切迫性、②非代替性、③一時性の3要件

## ➤ 手続

①組織による決定と個別支援計画への記載、  
②本人・家族への十分な説明、③行政への相談、報告、④必要な事項の記録

# 身体拘束とは

- ① 車いすやベッド等に縛り付ける
- ② 手指の機能を制限するために、ミトン型の手袋を付ける
- ③ 行動を制限するために、介護衣(つなぎ服)を着せる
- ④ 支援者が自分の体で利用者を押さえ付けて行動を制限する
- ⑤ 行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる
- ⑥ 自分の意思で開けることのできない居室等に隔離する

# 身体拘束の法令上の位置づけ

●「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者 支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準」(平成18年9月29日付厚生労働省令第172号)第48条等、「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害福祉サービス事業等の人員、設備及び運営に関する基準」(平成18年9月29日付厚生労働省令第171号)第73条等

- ・ 「…利用者又は他の利用者の生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体的拘束その他利用者の行動を制限する行為(以下「身体拘束等」という。)を行ってはならない。」
- ・ 「…やむを得ず身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録しなければならない。」

# 記録のポイント

## 運営基準

「やむを得ず身体拘束等を行う場合には、その態様及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由その他必要な事項を記録しなければならない。」

⇒①身体拘束に至った経緯、②理由、③態様（どのような身体拘束か）、④時間（拘束時刻、解除時刻）、⑤拘束時・解除後の本人の状況（様子）、⑥拘束減への取組み・今後の方針



# 学校・保育所等・医療機関 における虐待防止措置

## **第29条（就学する障害者に対する虐待の防止等）**

学校（学校教育法（昭和22年法律第26号）第1条に規定する学校、同法第124条に規定する専修学校又は同法第134条第1項に規定する各種学校をいう。以下同じ。）の長は、教職員、児童、生徒、学生その他の関係者に対する障害及び障害者に関する理解を深めるための研修の実施及び普及啓発、就学する障害者に対する虐待に関する相談に係る体制の整備、就学する障害者に対する虐待に対処するための措置その他の当該学校に就学する障害者に対する虐待を防止するため必要な措置を講ずるものとする。

## **第30条（保育所等に通う障害者に対する虐待の防止等）**

保育所等（児童福祉法（昭和22年法律第164号）第39条第1項に規定する保育所若しくは同法第59条第1項に規定する施設のうち同法第39条第1項に規定する業務を目的とするもの（少数の乳児又は幼児を対象とするものその他の厚生労働省令で定めるものを除く。）又は就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成18年法律第77号）第2条第6項に規定する認定こども園をいう。以下同じ。）の長は、保育所等の職員その他の関係者に対する障害及び障害者に関する理解を深めるための研修の実施及び普及啓発、保育所等に通う障害者に対する虐待に関する相談に係る体制の整備、保育所等に通う障害者に対する虐待に対処するための措置その他の当該保育所等に通う障害者に対する虐待を防止するため必要な措置を講ずるものとする。

## **第31条（医療機関を利用する障害者に対する虐待の防止等）**

医療機関（医療法（昭和23年法律第205号）第1条の5第1項に規定する病院又は同条第2項に規定する診療所をいう。以下同じ。）の管理者は、医療機関の職員その他の関係者に対する障害及び障害者に関する理解を深めるための研修の実施及び普及啓発、医療機関を利用する障害者に対する虐待に関する相談に係る体制の整備、医療機関を利用する障害者に対する虐待に対処するための措置その他の当該医療機関を利用する障害者に対する虐待を防止するため必要な措置を講ずるものとする。



# 虐待防止のポイント

# 虐待の共通の構図

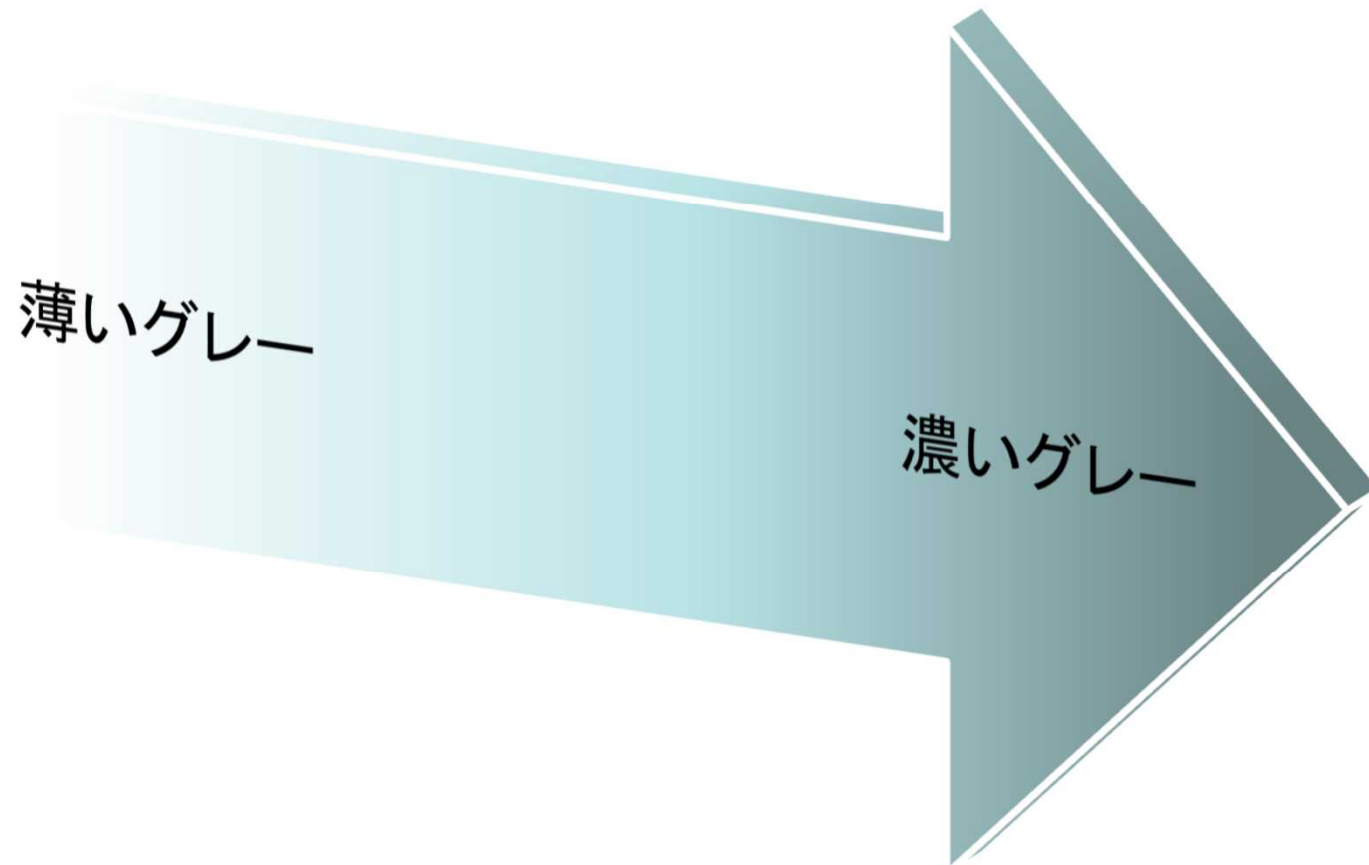
- ① 虐待は密室の環境下で行われる(環境)
- ② 障害者の権利を侵害する小さな出来事から心身に傷を負わせる行為にまで次第にエスカレートしていく(意識)
- ③ 職員に行動障害などに対する専門的な知識や技術がない場合に起こりやすい(専門性)

(障害保健福祉部長通知(平成17年10月20日)「障害者(児)施設における虐待の防止について」)

# 小さな出来事がエスカレートする理由

- 「言っても無駄」「言ったら不利益になる」という本人・支援者の意識
- 本人の意思表示が困難な特性
- 福祉現場の自由度の高さ
  - エスカレートを止める外的要因が少ない
  - ① 個々が「小さな出来事」を意識する（内的要因）
    - ② 現場レベルで共有する（外的要因）

# 「小さな出来事」とはなにか



# 常にここに戻る

障害者に対する虐待が障害者の尊厳を害するものであり、障害者の自立及び社会参加にとって障害者に対する虐待を防止することが極めて重大であること等に鑑み、障害者に対する虐待の禁止、国等の責務、障害者虐待を受けた障害者に対する保護及び自立の支援のための措置、養護者に対する支援のための措置等を定めることにより、障害者虐待の防止、養護者に対する支援等に対する施策を促進し、もって障害者の権利利益の擁護に資することを目的とする。

# 尊厳とは何か

- 憲法13条(個人の尊厳)
  - すべての人は、**個人として尊重**される
  - **幸福追求権**
- ⇒ 一人の人として「尊重」しているか
- ⇒ 本人の幸福追求の支援をしているか

# 学校等の虐待でも同じ

## 体罰関連行為のガイドライン

行為の分類		ガイドライン		
名称	特徴	内容	具体例	想定される事例
体罰	傷害行為 (肉体的苦痛)	懲戒のうち、教員が、児童・生徒の身体に、直接的・間接的に、肉体的苦痛を与える行為 【直接的】強くたたく、殴る、蹴る、投げる等 【間接的】長時間にわたる正座・起立等	有形力の行使により、物理的な力の程度や肉体的苦痛の有無に関わらず、出血、骨折、歯牙破折、鼓膜損傷等の傷害を負わせた場合	●授業中ふざけていた生徒を数回注意したが従わず、さらに増長したため、生徒を押し倒し骨折させた。 ●メールで友人の中傷を繰り返したため、事の重大性を分からせるため、頬を平手打ちし鼓膜損傷させた。
	危険な暴力行為 (肉体的苦痛)		一歩間違えば重大な傷害を負わせる可能性のある、急所・頭部・頸部に対する、あるいは棒や固定物等を使用して有形力を行使した場合や、柔道等の格闘技の技を用いた場合、又は椅子を投げ当てたなどした場合	●学級会で協力せず、他の児童の迷惑になる行動をしている児童に向かって、椅子を投げ当てた。 ●柔道有段者の教員が、廊下で反抗的な態度の生徒を背負い投げし床にたたきつけた。
	暴力行為 (肉体的苦痛)		頭・頬をたたく、突き飛ばす、足・臀部・脇腹を蹴る、髪を引っ張り引き倒す、長時間廊下に立たせる、長時間ランニングさせるなどした場合	●試合中にミスをしてチームが負けてしまったことの戒めとして、生徒の頬を複数回たたいた。 ●体育授業中、何度注意しても真面目にやろうとしない生徒がつばを吐いたため、後から足を蹴った。
不適切な行為	不適切な指導	肉体的負担	児童・生徒の身体に、肉体的負担を与える程度の、軽微な有形力の行使	●宿題を忘れた児童に対し、罰として鼻をつまみ、また忘れたら鼻をつまむと予告した。 ●チャイムが鳴っても教室に戻らず遊んでいた生徒の襟首をつかみ、教室まで連れていった。
	暴言等	精神的苦痛・負担	教員が、児童・生徒に、恐怖感、侮辱感、人権侵害等の精神的苦痛を与える不適切な言動	●授業中、解答を間違えた児童に、「犬のほうがおრიこうさん」と馬鹿にした。 ●事情を聴取している最中、答えない生徒に対し、棒で机をたたいたりして威嚇した。
	行き過ぎた指導	精神的・肉体的負担	運動部活動やスポーツ指導において、児童・生徒の現況に適合していない過剰な指導	●毎日、休みなく練習を続けさせ、生徒は心身ともに疲労し、勉強する時間もなくなった。 ●普段練習時間が少ないことから、合宿で経験したことのない長時間の練習メニューを課した。
指導の範囲内		肉体的苦痛や負担を伴わない	注意喚起や指導を浸透させるためにやむを得ず行われた、児童・生徒の身体に、肉体的負担を与えない程度の、極軽微な有形力の行使	●友達に暴言を吐き泣かせてしまった児童を正座させ、両肩を抑えながら説諭した。 ●授業中に騒いで立ち歩く生徒の腕をつかみ、教室の外に連れ出した。
適切な指導		懲戒行為 教育指導としての有形力の行使	学習指導や生活指導時における法令で認められた範囲の懲戒行為。スポーツ指導において、動きのタイミングを図る、注意喚起する、激励する、覚醒させるための有形力の行使	●授業中に物を投げた児童を注意し、残りの時間を教室後ろに立たせた。 ●大縄跳びの練習中、上手く中に入れない生徒の背中をたたきタイミングよく飛び込ませた。

## 小さな出来事①

周囲がさわがしく声が届かないので、Aさんに大きな声で話しかけました。その様子をたまたま見ていたご家族から、後に「職員が怒鳴りながら指示を出していた」と指摘がありました。



## 小さな出来事②

Bさんがなかなかイスに座ろうとしないので、両肩を上から押さえつけるように座らせました。その後も立ち上がろうとする度に座らせるようにしました。

## 小さな出来事③

Cさんは、いつも夕食時間を過ぎているのにゆっくり食べています。つい「もう時間ですよ。いらないなら下げますよ」と言ってしまったたり、食事介助のスピードを上げてしまいます。

## 小さな出来事④

他の方の支援中に、Dさんから「昨日いやなことがあった」と話しかけられました。

「今いそがしいからごめんなさいね～。ちょっとまっててくださいね～」と言ったまま、1日が過ぎてしまいました。

## 小さな出来事⑤

Eさんはなかなか水分を取られません。水分摂取のため、積極的に水を飲ませています。

また、Eさんはトイレで1回転倒したことがあったので、それ以降職員がトイレの個室に入って様子をみています。

## 小さな出来事⑥

Fさんは最近作業にあまり積極的に取り組んでくれません。

「給料もらえないですよ」「好きなもの買えなくなりますよ」などと言って作業を促しています。

## 小さな出来事⑦

Gさんはわがままな部分が多く、家庭でしつけができていないので、しつけのつもりで厳しく接することもあります。

## 小さな出来事⑧

Hさんと面談時、面談をスムーズに進めるために「はい」「いいえ」で答えられる質問を中心に進めてしまっています。

## 小さな出来事⑨

作業所で働くIさんの書類作成を支援していたのですが、職業欄に「無職」と書いたら、ご本人から「無職じゃない」と言われました。



## 小さな出来事⑩

Jさんは、半年前移動中にエレベーター内で他害行為をしてしまったことがあります。

今日も少し不穏な様子が見られたので、エレベーター内ではJさんと他の乗客の間に入って立ちました。

## 小さな出来事⑪

KさんはGHで生活していますが、最近近所の飲食店で仲の良くなった人から、5万円を貸して欲しいと言われ、どうしても貸してあげたい、と言っています。周りの人間としては止めたいので、「返ってこなかったらどうするの」などと伝えました。

## 小さな出来事⑫

Lさんは40歳の男性ですが、スタッフからは「じゅんちゃん」と呼ばれています。スタッフにちゃん付けとしている理由を聞いたところ「小さい頃から関わっているから」と言っていました。

## 小さな出来事⑬

Mさんは外出時車内で一人になると中から鍵を開けて飛び出してしまうので、チャイルドロックを使用しています。

小さな出来事（権利擁護の意識）  
を共有する取組み

# 共有に不可欠な「支援の対話」

「誰が何を考えているのかがわからない」では、  
権利擁護の意識は共有できない

⇒（チェックリストでの意識の伝達も重要ですが）

「支援」に関して話す時間を意図的に設ける

# 虐待防止委員会の役割

「支援」に関して話す場の設定

- 委員会「内」で話す
- 委員会「外」で話す
  - ① 話す研修の企画
  - ② 会議の枠組みを提示する
  - ③ 経営層と話す
  - ④ 目標設定と検証

# 研修例(1)

- 一人一つずつ「小さな出来事」を挙げてみましょう。
- その中で一つを取り上げて、本人の尊厳を考えた他の支援方法がないか、考えてみましょう。



## 研修例(2)

当事業所では、フロア（作業場）から廊下に出る  
ところに鍵のできる扉があります。

- 1 どのような場合に鍵をかけていますか。
- 2 それは身体拘束にあたりませんか。
- 3 身体拘束に当たる場合、3要件は満たされていますか。
- 4 身体拘束に当たる場合、これを減らすには  
何ができますか。

# 目標設定と検証

- ・目標を立てる

- ⇒一定期間(例えば1か月)で取り組み、アンケートをとる

- ⇒アンケートの結果を職員全員で共有する

- ⇒総括として話合いの場を設ける

# 目標設定と検証

- ・「言葉は支援のあり方を変える！～否定的な言葉がけを肯定的な言葉がけに変えてみよう～」
- ・「時間に追われる支援は要注意！～『早く』『急いで』という言葉を使わずに支援してみよう～」
- ・「呼び方は支援のあり方を映し出す～『さん』付けで呼んでみよう～」
- ・「尊厳の基礎は安心できる環境～笑顔での支援を心がけてみよう～」
- ・「本人の思いによりそった支援を考える～本人意思を尊重した支援を心がけてみよう～」
- ・「すべての言動に大切な思いがある～言動の背後にある思いを考えて支援をしてみよう～」
- ・「すべての人を尊重する～他の職員のすてきな支援に目を向けてみよう～」

# まとめ

- 虐待を考えることが権利擁護
- 迷いや悩み自体が本質
- 軸となる「尊厳」の中身を考える